

稲作

暑さ乗り越えピカピカ新米デビュー 次年に向けて高温対策の再確認を

生育概況

今年の出穂期は7月31日と平年より2日早くなり、出穂期以降、平均気温が平年よりも高く推移したことで、刈り取り適期も前進しました。出穂期後積算気温950℃到達日は9月7日（大曲アメダス）となりました。

一方で降雨が断続的にあったため、刈り取り作業はなかなか進まず、刈り取り始期（5%）は9月12日、盛期（50%）は9月27日となっています。

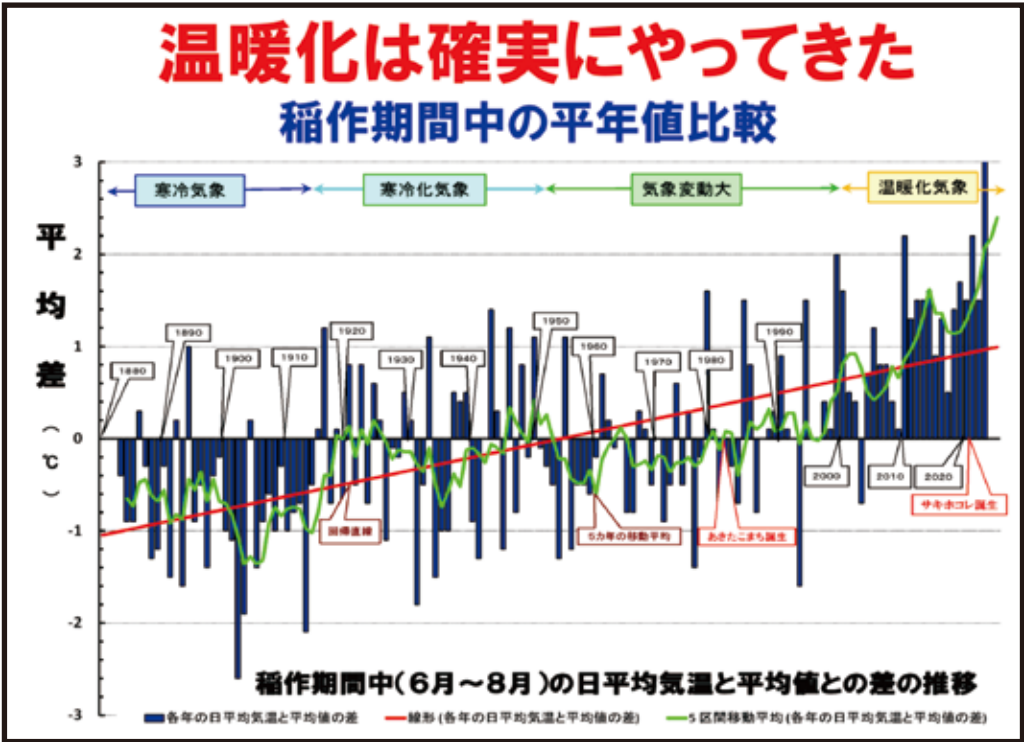
JAでの農産物検査状況は、10月1日現在で一等米比率99.3%となっており、高温下での登熟となったものの、品質は良好です。



高温対策

近年は「猛暑」が当たり前のようになり、稲作にも大きな影響を及ぼしています。ひと昔前はお盆を過ぎれば朝夕は涼しくなったものですが、最近では6月から9月まで暑い状態が続いています。その結果、生育ステージの前進や、登熟期の高温によって、白未熟粒や胴割れ米といった品質低下が増えていきます。せっかくの努力が収益に結びつかない状況は、多くの方の悩みとなっており対策をいかなければなりません。

そこで今回は、稲の高温障害を少しでも軽くするための対策について、これまでお伝えしてきた内容も含めてまとめました。小さな工夫の積み重ねが、秋の実りを守ることにつながります。



～令和6年3月稲作実績検討会資料より～

高温対策 根活

「根つこ元気でイネ笑顔」となるように、根の活力を維持することとで、高温にも耐える稲体を目指しましょう。高温下では、根の養水分吸収が低下するとともに、葉の温度が上昇してしまい、登熟に支障がでてしまいます。人間でいうところの熱中症状態です。

根の張りが浅かったり、弱かったりしないように、根を土中に広く、深く、しっかりと張らせることが重要です。そのための環境づくりを意識して作業に取り組みましょう。

根域確保

根が張っていきやすい、柔らかい作土を作ります。耕起作業時は碎土率を上げすぎず、スキマを残しつつ、耕深15センチを目標とします。

土中酸素と飽水管理

異常還元対策や土中の酸素不足解消のため、飽水管理や水の入れ替えをします。一時的な田面露出でも効果があります。

中干し

8葉期になったら、遅くならないうちに中干しに入ります。中干しで下層に根の伸長を促します。

高温対策 水管理

水管理は、高温下で直接稲体や地温を下げる役割があり、重要です。R5、R7年のように渇水となると手も足も出ません。限られた水資源ですので、地域で協力をして水回しをすることも大切です。

水は温まりにくく冷めにくい性質があります。日中溜め水にしておくと夜の水温が下がりやすく、熱が根に伝わり、活力が低下しやすくなります。高温時は飽水管理や水の入れ替えを実施します。フエーンが予報される時は湿水し、異常蒸散を防ぎます。

飽水管理

土壌の湿潤状態を保ち、気化熱によつて地温上昇を抑制します。中干し後からの高温時に効果発揮します。

水の入れ替え夜間入水

温かくなつた水を交換し、地温を下げます。または夜間に落水をして、日中との気温差を大きくするのも効果的です。

溝切り

溝切り跡は、効率的な水管理に必要となるほか、秋口まで効果を発揮します。水管理で苦勞する場合は必須作業です。

高温対策 栄養管理

夏バテ予防に栄養のある食べ物を取るように、稲にもスタミナをつけてやりましょう。高温下では、粉に送る栄養のほかに、稲体自体が消耗してしまう栄養もあります。チツソ肥料を控えすぎてしまうと、コメが痩せてしまったり、白未熟粒が発生したりと収入に直接影響が出てしまいます。そのため、基肥一発肥料を使用しているても、幼穂形成期や減数分裂期に生育栄養診断を実施し、天気予報も勘案しながら追肥実施の可否、量を検討しましょう。

穂肥・実肥

基肥のチツソ量は例年どおりであっても、その年の天候、気温によつて追肥を柔軟に実施できる体制をとります。JAでも追肥のご相談に対応します。

高温対策 観察眼

温暖化している中で去年と同じ作業日程でよいのでしょうか？高温で稲の生育ステージは前進気味となっています。「あきたこまち」でも近年は7月中に出穂することは珍しくなくなってきました。生育ステージの前進によって作業が適期にできない！ということもあります。

稲の様子をよく観察して、その年の生育はいつもどおりなのか、早まっているのかを見極める観察眼を養いましょう。畦畔際の1株だけでも良いので、観察株を設けたり、ザルピオフィールドマネージャー等の営農支援ツールを活用したりと、時期を見逃さない心がけをしましょう。

稲作営農情報をLINEで配信しているよ☆
友達登録してね♡



このページは秋田県農業共済組合との共同発行です。